

35 中国における内障に対する外科的

治療について

宮川 隆 弘

日本鍼灸研究会

中国における眼科の外科的治療は、隋以前から行わ

れている。『隋書』経籍志や両『唐書』には「療目方五卷」が著録されるが、最も注目すべき眼科書は『白居易集』巻二十四にも見える『龍樹論』である。この龍樹は、明の薛己が言うところの南齊の人ではなく、紀元前三世紀頃のインドの仏教哲学者であるが、能く眼疾を療したとの伝承から、中国では唐代以降、医書や眼科書に仮託されることが多い。『隋書』経籍志に「龍樹菩薩藥方四卷」や「龍樹菩薩和香法二卷」「龍樹菩薩養性方一卷」、『宋史』芸文志に「龍樹眼論一卷」、『崇文総目』にも「龍樹眼論一卷」、晁公武の『郡齋讀書志』には「龍樹眼論三卷。右仏經、龍樹大士者、能治眼疾。或假其說、集治七十二種目病之方。」、わが国の『日本

国見在書目録』にも「龍樹菩薩眼經一」の著録がみられるが、いずれも現存していない。この『龍樹眼論』あるいは「龍樹菩薩眼經」の内容を伝える考えられるものとしては、『千金方』『千金翼方』などにはみられないものの、『外台秘要方』巻二十一の謝道人「天竺經論眼」の引用に類文が見られる。また「医心方」には『龍樹眼論』の佚文が見られる。

宋代初期に王懷隱らが編纂した『太平聖恵方』巻三十二・眼内障論には、白内障の手法についての詳しい記述が見られる。ここでは、内障の硬・軟に応じて小鍼・大鍼を使用することが主張され、手技の前後の準備及び切開後の処置についても詳細である。内障の基本的概念は、五輪八郭の説を主体とするが、白内障に対する鍼による処置については、病態分類から処置の際の留意点や処置後の方法に至るまで、多くの文字を費やして欠けるところが無い。『太平聖恵方』の眼科関係の記述は、『諸病源候論』に負うところが多いが、北宋代頃に出た『龍木論』に依拠していると考えられる点がある。本内容は、後代の眼科の外科的治療に相当

な影響を及ぼし、既に宋代においても『聖濟総録』などに部分的に収載されていたが、明代初期の成立した『普濟方』では『太平聖惠方』掲載の鍼の手法に関する全文が引用されている。このことは、明代当時の内障に対する処置が古伝のそれを採用していたことを示唆している。なお、内障に関連する手法の記述が見られる『秘伝眼科龍木総論』十巻は、『太平聖惠方』記載の内容を「鍼内障眼法歌」及び「鍼内障後法歌」と題して要約したもので、わが国に古抄本が伝存し、また明代以降には刊本も出ている。その内容は、たとえば明の呉崑著『針方六集』針方尊經集の「晴中穴主治内障二十九」において、「龍木居士金針拔転瞳人妙決」と題して内障の鍼による処置方法を、「針内障秘決歌」や「針内障要歌」と題して内障の処置及び注意事項が歌賦形式で詳細に述べられている。『針方六集』所載の記述は、他の医書に見られない内容を包括し、しかも「治一切内障、年久不視物、頃刻光明、神秘穴也。」という記述もあることから、当時の眼科医療を考える上で重要である。

なお、眼科書として有名なものに『銀海精微』があるが、後代の偽作とする『四庫全書総目提要』の説に従い、本考察の対象からは除外した。